

## ニュースレター

### NO. 13

2002.8.1

名古屋大学大学院 国際開発研究科

発行 電話 464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ (052) 789-4953

FAX (052) 789-4951

GSID ホームページ <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

## 明石康氏・小和田恆氏 来校!!



明石 康氏



小和田 恆氏

2001年度学位授与式の翌日である3月26日に明石康氏（元国連事務次長）と小和田恆氏（元国連大使）をお迎えし、今後のアフガン復興支援と日本の役割についての講演・討論会を開催しました。

この講演会は佐藤安信教授が主催する「紛争と開発」に関する連続セミナーの最終回として開催され、150名を超える聴衆の参加を得ました。

9.11以後、テロ、紛争、平和構築といった事柄に対する人々の関心が高まっている中で、日本を代表するこの分野の専門家であるお二人を、それも同時にお迎えし、貴重なご意見やお考えをうかがうことが出来たことはGSIDにとってこの上ないイベントでした。

明石氏の「国連から見た日本」、小和田氏の「日本から見た国連」と題する講演につづいて、当日のコメンテーターを引き受けていただいた、中西久枝研究科教授と児玉克哉三重大学助教授から両氏のご発表へのコメントがあり、その後、フロアの参加者を交えて活発な質疑応答が行われました。

講演会の後は、場所を1階のプレゼンテーション・ルームに移し、両氏を交えての懇親会が催されました。ここでも、両氏を囲む人々の輪が途切れることはなく、1時間ほどの短い懇親会はあっという間に過ぎてしまいました。



左から佐藤教授、中西教授、児玉三重大助教授、小和田氏



8階オーディトリウム：150名を超える参加者

## 2001年度学位授与

2002年3月25日に学位授与式が行われ、15名の方に博士の学位が、73名に修士の学位が授与されました。



【国際開発専攻】



【国際協力専攻】



【国際コミュニケーション専攻】



【修士号授与式】



**江崎新研究科長**  
3年間研究科長の任にあった長田教授からバトンタッチされ、この4月から江崎光男教授が研究科長に就任されました。

### 【江崎 光男教授略歴】

- 1943年生まれ
- 1966年3月 東京大学教養学部教養学科卒業
- 1968年3月 東京大学大学院経済学研究科修了  
(経済学修士)
- 1968-69年 大阪大学社会経済研究所・助手
- 1969-77年 京都大学東南アジア研究センター・助手
- 1977-91年 京都大学東南アジア研究センター・助教授
- 1991-現在 名古屋大学大学院国際開発研究科・教授
- 1970-72、73-74年 ハーバード大学大学院に留学  
(Ph.D.取得)
- 1975-76年 フィリピン大学経済学部・客員準教授
- 1978-79年 国連アジア太平洋経済社会委員会  
(ESCAP)・経済問題担当官
- 1981-82年 インドネシア開発計画庁・JICAプロジェクト研究員
- 1989-90年 フィリピン大学経済学部・客員教授
- 1995-96年 国連大学高等研究所 (UNU/IAS)・客員教授





## スタッフ紹介



国際コミュニケーション専攻  
助教授 内田 綾子

2001年6月に、国際コミュニケーション専攻の基幹教官に着任いたしました。名古屋大学に赴任したのは1996年ですが、以前は言語文化部に所属して協力講座の異文化摩擦論を担当してきました。もともとはアメリカ研究・アメリカ史が専門で、アメリカ先住民を中心に合衆国の多元的国民統合のあり方について研究しています。着任早々ですが、2001年9月より10ヶ月間、長期在外研究の機会をいただき、カンザス大学に滞在して先住民の社会・文化的位置と多文化教育の取り組みについてリサーチしてきました。大学町ローレンスには、ハスケル・インディアン部族大学という全米でも珍しい部族間大学も存在します。先住民は合衆国のマイノリティの中でも貧困率が高く、様々な社会問題に直面しながらも、部族の自治と文化的伝統の維持を模索してきました。今日では、高等教育を通じて先住民自らのリーダーシップとエンパワーメントが促されています。

今回のアメリカ滞在は、最近の国際情勢について考えるよい機会になっています。テロ事件直後に渡米したため、一定の緊張下で内側からアメリカの対応を眺めることが出来たと思います。世界中から数多くの留学生を受け入れ、学問的交流のみならず、国際的友好を築こうとするアメリカの懐の広さには、従来から注目してきました。この教育交流を通じた知の集積と人的ネットワークこそがアメリカの底力となっているのではと思われまます。それだけに、テロ事件の影響から、これまでに築かれてきた草の根の交流と自由な言論の気風が損なわれることはないか、複雑な心境です。これだけ文化や情報がボーダーレス化し、国際交流が定着した時代にあっても、戦争やテロなどの緊急時には、国家や民族、宗教といったカテゴリーによって分断されてしまうしかないのでしょうか。

今後は、集団間の問題解決、関係調整をはかる研究の必要性がますます高まってくると思われまます。近年、国際理解教育や異文化理解の重要性が唱えられていますが、そもそも、文化的差異の認識をどのようにして共感にまで高めていけるのか、途上国やマイノリティの境遇に対していかに想像力とセンシティブティを養っていくのか、といったことは異文化コミュニケーションの分野に限定されない大きな課題でしょう。貧困や政治的周縁化、文化的疎外といったたえず途上国を追いつめていく問題に対して、先進

国が向き合わないかぎり摩擦や紛争は避けられないはずで、最近の環境開発をめぐる先進国と途上国との不調和を見ても、前途は決して明るくないのかもしれませんが。にもかかわらず、現実に対してあまり悲観的にならずに相互に依存した運命共同体というグローバル像を提示し、実践へ導いていくことがとりわけ教育の場では大切なのでしょう。国際開発研究科では各国からの留学生が多く学んでいるうえに、経済援助や教育開発、コミュニケーションといったまさに今日的な課題が研究されています。今後ともスタッフや学生の皆さんから示唆を受けつつ、あれこれと思考していきたい思います。

## シンポジウム

### 名古屋大学国際フォーラム

「新世紀を築く大学の英知」サテライト・フォーラム

「国際シンポジウム比較語彙研究Ⅲ」

名古屋大学文学研究科・国際開発研究科教授

田島 毓堂

このシンポジウムは、従来、言語学の中で未開な分野であったが、新世紀の言語研究をリードしていく理論として画期的な比較語彙論の理論面と実践面における成果の発表を軸にしたもので、文学研究科と国際開発研究科・国際言語文化研究科・人間情報学研究科が共催した。既に、1998年、名古屋大学文学部創立50周年記念に協賛して第1回を開き、続いて、2000年には国際開発研究科創立10周年記念に協賛して第2回のシンポジウムを催して、語彙論確立に貢献する多くの成果を得たものである。

今回、名古屋大学国際フォーラム「新世紀を築く大学の英知」にふさわしい催しとして、その第3回の国際シンポジウム比較語彙研究を各研究科で共催し、比較語彙論の現状を示し、その一層の発展と可能性を追求することを目的に、計画立案し、国際開発研究科多目的オーデトリウムを会場に、6月15日と16日の両日、研究発表と討論が行われた。

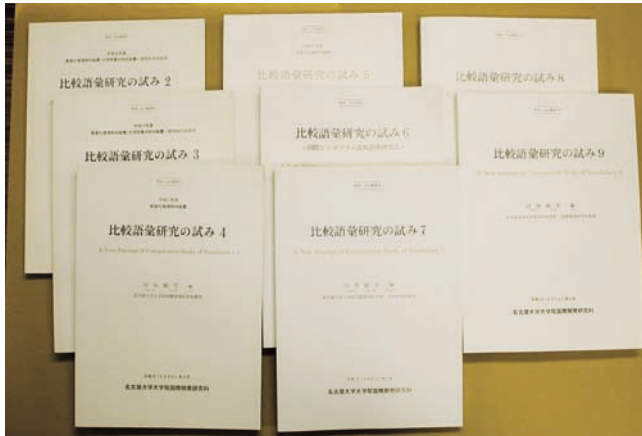
参加者は、本学と学術交流をしている韓国、中国、台湾、マレーシア、インドネシアの大学の研究者、本学出身の研究者、及び、日本国内の研究者、また名古屋大学大学院文学研究科・国際開発研究科・国際言語文化研究科・人間情報学研究科在籍の学生・留学生で、シンポジウムは盛況裡に多くの成果を得て無事終了し、今後の発展を期待させた。

研究発表は、日本語学習者や日本語研究者が注目する「擬音語・擬態語（オノマトペ・活写語・音象徴語などと言われる）」の問題、意味分野別構造分析法による語彙分

析の実際・そのための基盤であるコード付けの問題・さらにその根底にある意味記述の問題・『分類語彙表』の翻訳等多岐にわたり、活発な発表と討論が行われた。

発表者は、国別に、韓国11人、中国2人、台湾5人、インドネシア5人、マレーシア1人、ベトナム1人、日本人は、講演・討論発題者3人を含め7人、全部で32名。今回、このシンポジウムのために海外から来日したのは11人、この他、インドネシアパジャジャラン大学文学部長ご夫妻がオブザーバーで参加された。2日間にわたって行われた研究発表と討論会には、延べで200名が参加した。

語彙は言語の中で、それを育んだ生活・文化と密接な関係を持ち、それと、相互関係が一番はっきり現れる側面である。そのため、言語の中でもっとも混沌とした一面を持ち、研究も遅れていた。しかし、現実との関係を断ち切った中で、発展したかに見えるが、袋小路に入り込んだ感のある言語研究に活を与えるのは、現実と密接な関連を持つ語彙の研究である。特に比較語彙研究は、語彙の比較を通じて、それに反映する文化の比較を目的としており、異文化比較理解を通して、今後の国際関係を発展させる上でも、重要な役割を負っており、今後の発展が大いに期待される。このシンポジウムはその発展の一里塚として位置づけられる。



【これまでに刊行された比較語彙研究の業績】

## NEWS

### 本校からなごや民間大使！

名古屋市の名古屋国際センターが実施している国際交流事業「なごや民間大使」の第30代民間大使に本校のロジュニョーイ・ヘドウィグさんが選ばれました。1999年にも、本校在籍者から民間大使が選ばれたことがあり、彼女が2人目となります。

「なごや民間大使」とは、名古屋国際センターの特別嘱

託職員として、母国の文化などを紹介しながら、1年の期間中、国際交流・国際理解事業を行うというものです。自ら様々な事業を企画・実施するなど、大変な重責を担っています。

今回、大変忙しいスケジュールの合間を縫ってのインタビューで、「なごや民間大使」としての抱負などを語っていただきました。

——これまでにどのような活動をされましたか？

すでに6月23日に母国を紹介する集いを行いました。トークやハンガリーのフォークダンスそして音楽を交えたこの企画は、百数十名の参加を得て、大変盛況でした。

——これからどのような企画を行う予定ですか？

来年の1月31日から2月3日にかけて、駐日ハンガリー大使を招いての大イベントを計画中です。そのイベントでは、ヨーロッパの中央としての意味合いが強まりつつあるハンガリーと、日本の中央に位置する愛知との接点や共通点を題材にしながら、文化、歴史、経済、政治といった多岐に渡るパネル・ディスカッションを行う予定です。

——これまでの活動で何か得たものとかはありますか？

異文化理解教育の一環として、各地の小・中学校に出かけていますが、現在の日本の子供達の生活を垣間見るに付け、母国ハンガリーで自身が経験してきた教育の有り方を、何とか日本に紹介できないだろうか、と思っています。もっとのびのびとした教育、つまりゆとりのある教育を紹介できればと思っています。

#### 【プロフィール】ロジュニョーイ・ヘドウィグ



(Rozsnyoi Hedvig) ハンガリー共和国、ミシュコルツ市生まれ。1995年来日。東京大学大学院研究生の後、GSIDに入学し、1997年4月に国際開発専攻博士後期課程に進学。現在は民間大使の任務のため休学中。

#### スタッフの人事異動

##### 【教 官】

H14.4.1

研究科長併任（～H16.3.31）江崎 光男教授

H14.4.1 退職

実地研修担当

杉山 悦子助手（国際協力事業団へ）

H14.6.15 退職

論文執筆補助担当（英語担当）

Suzan Mary Tennant 助手

#### H14.4.1協力講座教官の交替

##### 国際開発専攻開発政策講座

奥村 隆平教授から多和田 眞教授へ

金井 雄一教授から和合 肇教授へ

##### 国際開発専攻経営開発講座

友杉 芳正教授から北原 淳教授へ

竹内 常善教授から佐藤 倫正教授へ

##### 国際開発専攻教育発展史講座

今津孝次郎教授から近藤 孝弘助教授へ

##### 国際協力専攻比較国際法政システム講座

鮎京 正訓教授から中東 正文助教授へ

##### 国際協力専攻国際文化協力講座

周藤 芳幸助教授から池内 敏教授へ

##### 国際コミュニケーション専攻国際言語文化学講座

内田 綾子助教授から山下 淳子助教授へ(内田助教授の国際コミュニケーション講座への配置換えに伴う異動)

##### 国際コミュニケーション専攻コミュニケーション技術論講座

濱田 義孝助教授から大野 裕助教授へ

#### 【事務】

#### H14.4.1 転出

事務掛長 前田 幸雄(言語文化部事務掛長へ)

情報資料室主任 次郎 丸章(岐阜大図書館へ)

会計担当主任 武市 全弘(核融合研究所へ)

#### H14.4.1 転入

事務掛長 長田 昭夫(愛知教育大学から)

情報資料室主任 棚橋 是之(名大図書館から)

会計主任 竹川 弘子(文学研究科から)

### 客員研究員の紹介

#### 国内客員研究員

藤村 学(アジア開発銀行 エコノミスト)

研究題目:プロジェクト評価の改善—ADB関連プロジェクトを事例として—

期 間: H14.14.1~H14.9.30

朽木 昭文(アジア経済研究所 研究員)

研究題目:開発政策の優先順位決定論

期 間: H14.10.1~H15.3.31

コンダカル・ミザナル・ラーマン(日本福祉大学経済学部教授)

研究題目:アジアにおける経済開発特別区の比較経営的考察

期 間: H14.4.1~H14.9.30

チョー・サン・ウィン(愛知学院大学情報社会政策学部助教授)

研究題目:ミャンマーにおける社会開発の現状

期 間: H14.10.1~H15.3.31

中島 真志(日本銀行国際局調査役)

研究題目:決済システムの国際比較

期 間: H14.4.1~H14.6.30

鈴木 直喜(清泉女子大学文学部助教授)

研究題目:NGO論

期 間: H14.10.1~H14.12.31

絵所 秀紀(法政大学経済学部教授)

研究題目:開発理論における法と経済の接点:制度派経済学の視点から

期 間: H15.1.1~H15.3.31

広瀬 英史(静岡文化芸術大学専任講師)

研究題目:語彙史の研究

期 間: H14.4.1~H14.6.30

ファビオ・ランベッリ(札幌大学文化学部助教授)

研究題目:記号論を応用して開発レポートを解釈する

期 間: H14.7.1~H14.9.30

間宮 勇(明治大学法学部)

研究題目:WTO体制の現段階

期 間: H15.1.1~H15.3.31

岡田 尚美(国際開発高等教育機構事業部次長)

研究題目:開発プロジェクトの管理運営手法研究について

期 間: H14.4.1~H14.9.30

宮田スザンヌ(愛知淑徳大学文化創造学部助教授)

研究題目:言語習得研究のための言語発達指標の開発

期 間: H14.7.1~H14.12.31

岩佐 一枝(神戸市立外国語大学非常勤講師)

研究題目:中国西南少数民族の言語と社会

期 間: H14.10.1~H15.3.31

#### 外国人客員研究員

Kitinoja, Helli(キティノジャ ヘリ)(セイナジョキ・ポリテクニック大学国際関係担当部長、保健学科長)

研究題目:日本とフィンランドにおける高齢者保健と自立生活支援のための健康ケア通信学に関する研究

期 間: H14.10.7~H.15.1.7

Lavoie, Marie(ラヴォア マリー)(ヨーク大学経済学部助教授)

研究題目:人的資本の形成におけるインフォーマル・ノーマル学習の貢献

期 間: H15.1.8~H15.4.8



孫 春日 (スン チュンリー) (延辺大学民族研究所教授)

研究題目：中国東北地方における日本植民地政策と民族移動に関する研究

期 間：H14.11.19～H15.3.31

Smith, Malcolm David Hamilton (スミス マルコム デービッド ハミルトン) (メルボルン大学法学研究科アジア法センター長、教授)

研究課題：日豪比較ビジネス法

期 間：H14.10.1～H15.1.12

Doughty, Catherine (ドーティ キャサリン) (ハワイ大学マノア校第二外国語学部助教授)

研究題目：第二言語習得理論に基づいたコンピュータ支援語学学習評価システムの開発

期 間：H14.5.18～H14.8.18

鄭 泰泳 (チョン テヨン) (弘益大学経営学部準教授)

研究題目：日本多国籍企業の資本構成に関する研究

期 間：H14.4.1～H14.9.30

Raoul Blin (ラウル ブラン) (フランス国立科学研究センター研究員)

研究題目：日本語学 (統語論と意味論)

期 間：H14.8.19～H14.11.18

Michael H. Long (マイケル ロング) (ハワイ大学マノア校教授)

研究題目：学習者の個人差に関する研究成果を生かした外国語コースデザイン

期 間：H14.5.18～H14.8.18

## お知らせ

### 平成14年度 公開講座のお知らせ

市民を対象とした公開講座が下記日程にて開催されます。

テ ー マ：同時多発テロ以降の国際関係と国際協力

開催期間：平成14年9月12日から10月31日まで (毎週木曜日、計8回)

#### 【講座内容】

昨年9月11日に米国で起こったいわゆる同時多発テロは、新たな戦争の始まりであると宣言されるほど世界を震撼させ、その後の国際関係と国際協力のあり方について、理論的実務的な見直しを迫るものでした。この講座では、今世紀的な課題である紛争の構造を、国際政治、国際法、開発経済、社会学、平和研究などの立場から分析し、紛争の予防と平和構築のためにあるべき国際協力を考えます。有事関連法案が国会で審議されている今日、日本として今何を

為すべきかを冷静かつ真剣に考えてみたいと思います。8回に分けて毎週木曜日の夕方行います。

■9月12日 長田 博「グローバリゼーション下の国際経済関係」(国際開発研究科教授)

■9月19日 孫崎 享「中東・中央アジア情勢と日本の安全保障・危機管理」(防衛大学校人文・社会科学群公共政策学科教授)

■9月26日 中西 久枝「同時多発テロの背景とその意味」(国際開発研究科教授)

■10月3日 佐藤 安信「人間の安全保障と平和構築：日本の貢献」(国際開発研究科教授)

■10月10日 伊東 早苗「貧困とテロ」(国際開発研究科助教授)

■10月17日 横山 和子「今後の国際機関の役割と国際公務員」(東洋学園大学人文学部教授)

■10月24日 児玉 克哉「NGOと国連」(三重大学人文学部助教授)

■10月31日 木村 宏恒「グローバル・ガバナンスと国際政治」(国際開発研究科教授)

申込み方法・詳細等については、以下のURLをご参照下さい。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/outinfo/research/extension/index.html>

## 出版物

田島 毓堂『比較語彙研究の試み8』開発文化叢書 No.38、2002年。

田島 毓堂『比較語彙研究の試み9』開発文化叢書 No.39、2002年。

『国際開発研究フォーラム』21号 (2002年3月)

なお、21号からPDFファイル化に伴い、ダウンロードが以下のURLで可能になりました。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/outinfo/research/pub/Forum/index-jp.html>

